

旧第11通学区 高等学校教育懇話会 研究部会Ⅰ 報告書

1 会議の開催経過

(1) 第1回会議

- ア 日時・場所 令和2年11月9日(月) 14:00~16:00
勤労者福祉センター 2-2会議室
- イ 主な内容 旧第11通学区の県立高校のあり方についての意見交換

(2) 第2回会議

- ア 日時・場所 令和2年12月21日(月) 9:30~12:00
勤労者福祉センター 2-2会議室
- イ 主な内容 松本市内高等学校長からの聞き取り

(3) 第3回会議

- ア 日時・場所 令和3年2月12日(金) 10:00~12:00
勤労者福祉センター 2-2会議室
- イ 主な内容 研究部会Ⅰの報告案について

2 構成員

赤羽松本市教育長、飯森麻績村教育長、宮下筑北村教育長(第1回、第2回)、
滝澤筑北村教育長(第3回)、高梨JA松本ハイランド組合長代理(第2回)、
横内JA松本ハイランド組合長代理(第3回)、井上松本商工会議所会頭、
古屋松本市PTA連合会長、藤田松本市中学校長会長、
杉村松本県ヶ丘高等学校長、荒井信州大学准教授
事務局(長野県教育委員会、松本市・麻績村・筑北村教育委員会)

3 高校のあり方に関する委員の意見

(1) 情報発信・提供について

《現状認識と対応》

- ア 高校の環境づくりについては、新たな学びの推進と、いわゆる編成整備計画の2軸で進んでいるが、その動きとねらいがどのくらい周知されているかが重要
- イ 高等学校の再編については、保護者や同窓会への早めの周知、丁寧な説明、きめ細やかな情報発信が必要
- ウ 情報発信に当たっては、今はホームページよりSNSの時代
- エ 高校再編に関してホームページはあるが、関連資料を常にダウンロードできるような形にしておくことが重要
- オ 現在、すべての高校が、同じフォーマットで掲載している学校目標を活用し、さらなる情報発信が必要
- カ 各高校がどんな活動をしているのか、総合的に見ることができるときの機会が必要
- キ 進路を選択し決定する上では、活字の情報以上に体験教室やその学校の学生との懇談などの体験が大事。各校の特徴が伝わる機会が必要

ク 改革に向け、各校において具体的なアクションが起きているが、子どもたちに各校の魅力の周知が不十分。各校の特色や取組みを知れば、意欲の向上と適切な判断が可能

ケ 県立高校の情報発信については、資料の媒体のリソースが限られている中で、相当頑張らないといけない状態。伝わり具合を自覚的に問い直すことが必要。パンフレットを見て一番伝わってくるのは生徒の気持。例えば自治や自律的な学びという点で、高校生自身が語って伝える場や、ホームページや動画など、様々なツールにより、大人だけではなく一緒にというやり方も重要

コ 周知の問題については、具体的な案が見えてきた時に初めて関心が向く。

サ 最終的に再編案と学びの2本柱が固まった時点で、しっかり周知し、様々な論議が必要

《高校への理解度》

シ 保護者を含め関係者でさえも、今の高校教育については、自分達の経験からの見方のみ

ス 情報発信、情報提供に関しては、学びのスタイルの変化、高校再編の議論という2つの柱がある中で、高校再編は色々な価値観があり、課題があるが、学びのスタイルが変わることは多分合意は可能。ただし、学びのスタイルの変化でさえも世代によって合意は困難

セ 学びのスタイルに関して、例えば県として、プロモーション動画を作って、ホームページやSNSを活用するなど、学びがどのように変化するのかということを伝え続けないと理解は困難。現在の資料だと、人が減るから再編するしかないという印象

(2) 学びのスタイルについて

《子どもや親の視点で》

ア 総合学科と総合技術高校があり、名称がわかりにくい。

イ 今の子どもは、どこの高校というより、グローバル化が進む中で世界に目を向け、先の先を見て進学先を選択

ウ 子どもたちは、多様な学びや部活動などの魅力や特色を、総合的に捉えて進路を選択。子どもたちが目指したいものは多様化し、県外への進学も多数。保護者としては、子どもの学びたいところで学ばせたいという希望

エ 子どもが、通学の利便性や部活の魅力で高校を選択しても、親としては学力での選択が多い。子どもの希望に沿わない高校を選択した場合、途中退学の可能性もあり、中学の進路指導は重要

オ 麻績では、通学が松本方面と長野方面で半々。池田、穂高に通う子どももあり、子どもたちの選択肢は広範。子どもたちは学力も十分に考慮しながらの志望校選択。親の意見よりも子どもの希望を尊重

カ 昔の人は、大学への進学率重視だが、今の子どもたちは大学等への進学先よりも想像以上に世界を視野にし、考え方の乖離を実感。そうした教育は山間部でも可能なため、夢が持てる全日制が必要

キ 子どもの多様化が進行し、親の意識が追いついていない。親は自分の受けた教育観で子どもの進学先を選び、親子関係悪化の一因。一方で、戦略的に考えている保護者も松本地区では増加

ク 昔は各学校の特徴は、主に学力での認識だが、今回各校の特色を聞いて相当な変化を実感。探究的な学びの必要性や、高校と地域との連携についても新たに認識。各校の取組みや特色について、PTA連合会での情報発信も必要

《高校からの視点で》

ケ 高校は、実施方針の新たな学びの推進と、文科省の新しい学習指導要領が今までと違う中で、学校目標や、評価方法について悩み、検討中

コ 高校入学後の進路変更はある。理由は複合的で、勉強についていけないということに加え、友達関係が大きい。退学よりも転学を選択し、通信制を選ぶことが非常に多い。転学で環境が変わって頑張れた子も大勢いるので、通信制の役割は重要。最近では、自分の将来を見据えて通信制選択も積極的

サ 高校の留年はゼロではないが少数。県立の通信制は学力保障ということもあり厳しいが、私学の通信制の方が融通性

シ この通学区で、文科省の指定が無く、中高一貫校がないのは全国の自治体を見ても珍しい。全国では、町立高校設置もある時代なので、今後、可能性あり。

ス 高校の教育は、子どもたちの将来進む方向を決める上でとても重要。進学に限らず、将来に夢を持たせることが大事。各学校の特色ある取組みの中で、インターナショナルやグローバルな感覚で夢を持たせ、モチベーションを上げる取組みが必要

セ 高校は、高校生の日々の姿からも、学びのスタイルの探究型へのシフトを真摯に受け止め、危機感を共有

《その他》

ソ 今の高校は、大学へ行くための予備校。高校でのさらなる専門性が必要

タ 子どもたちの現状をとらえ、昔は良かったというような議論には注意が必要

チ これまでの慣習に囚われず、県が目指す高校改革をこれからの国際化を踏まえたグローバルな視点で論議し、特色ある高校づくりについての意見交換が必要

ツ これまでの学力観を変えていくことが必要。夢を描きながらの議論により、子どもたちにとってよい方向を考えることが重要

テ 若い人たちとの考え方のギャップを埋めていくことが必要

ト 県教育委員会が掲げている夢に挑戦する学びは、キャリア教育という点では抽象的。モチベーション的に課題もあるが、高校生の段階で大きな夢を抱かずしていつ抱くのかということもあるので、ありのままのお子さんの受け止めも大事だが、モチベーションや学習の動機を含めて、高校には子どもたちの可能性の拡大を期待

ナ 松本のまちに来たい、学びたいという子どもたち。松本は魅力あるまち

(3) 公立・私立と定時制・通信制について

《公立の役割》

ア 公立学校の役割は、学びの下支えとして、学習の幅の広さや丁寧さ、学びたいことを学びたいところでという子どもたちに夢を持たせるということ。そこを押しえながら特色を出し、子どもたちが選択できるようになることが重要

イ 懇話会の場でも、公立高校の地域との関係性については大きなテーマ。多くの地域連携の取組事例があるが、さらに強化すべき。私立高校がここに力を入れてくると、公立高校の役割は何かという問いかけになる。

ウ 中信地区には、文科省の教育指定校が一つもない。今年度、松本国際が中高一貫校になり、秀峰は元々中等教育学校だが、県立の中高一貫校が東信と中信にはないことが課題

《私立の取組み》

エ 私立は、この15年間練りに練った戦略を立て、多様なバリエーションを生んだ。公立高校は、危機意識を持つことが重要

オ 私立高校では15年前から少子化について議論し、生き残りのための魅力ある学校づくりを実践。私立と公立の共生も必要なため、情報共有が重要

カ 今は公立高校の不合格者は、私立に行き中学浪人がほとんどいない状況。私立は経済的負担が大きという課題があるが、私立入学者が伸びている要因の一つ

《定時制・通信制》

キ 定時制に通う生徒の8割は不登校経験者。少子化にも関わらず、定時制では生徒数が減っていない現状があり、高校再編の問題は、公立と私立と定時制の3極化

ク 筑摩高校では、入学前の支援会議の開催など、非常に丁寧な受け入れ。1、2年への対応が重要で、就職や進学の新たな道に繋げるためには、そこを乗り切る支援が重要

ケ 公立高校に進学後、途中から進路変更し、通信制などに行く子もいる。定時制、通信制も、子どもたちにとっては貴重な居場所であり、進路選択の一つ

コ 定時制・通信制については、国でも議論があるが、広域通信制の評判が全国的にはあまり良くないのに対し、筑摩高校の丁寧な対応はギャップを感じる。

サ 中学卒業後の進路は、インターネットの通信制と決めて中学時代を過ごす不登校の子どもたちも実在する中、進路指導は、中学の教員にとって非常に悩ましい部分

シ 夢の実現には通信制が重要なため、今後は拡大すべき。個の学びの保障が重要

(4) 特別な支援を要する子どもへの対応について

《基本的なスタンスとして》

ア 子どもたちの個性、特性を含め、多様化が進む中で、どう学びを保障していくかが大事。不登校などの現状を踏まえ、新たなスタートを求めて進学する子どもたちも大勢いる。特別支援教育の充実など、進学先の選択肢が増えることを希望

イ 特別支援の子どもたちについては、現在の県立高校では、すべてが受け入れられないのが現状。すべての子どもへの学びの保障が必要

- ウ 不登校が増加傾向にあることは義務教育の中でも課題だが、通信制も含め、公立、私立高校共に一生懸命取り組んでいることを理解した。
- エ 不登校など、多様な子どもが増える中で、高校も多様化し、それぞれどこかが受け皿となり、全員が受け入れられることで地域全体が良くなる必要がある
- オ 複数の学校で、特別な配慮が必要な生徒の増加とその対応について話題となった。今後は、一人ひとりに寄り添った教育が大事なポイント
- カ 特別な支援が必要な子や多様な子どもたちに対するケアをどうするのかということは、対応できない学校がないよう学校全体として考えなくてはいけないこと。県教育委員会にきちんと伝えて改善すべき

《具体的な対応等》

- キ 日本ウェルネス長野高等学校は、自閉症や知的障害など障害がある子どもも多く受け入れており、非常に特色ある高校
- ク 少子化が進む中で、信濃むつみ高校や松本筑摩高校の生徒は増加。背景には不登校の子どもが増加などがあり、他の高校とは分けて考えるべき
- ケ 岐阜県では、不登校特認校と銘打った高校を意図的に県として打ち出している。不登校と銘打つかはかなり慎重であるべきかと思うが、多様な子どもへのケアは考えていくことが必要
- コ 不登校をはじめ、発達障害とか、自尊感情を持ってないなどのいわゆる愛着障害など、子どもたちが多様化。松本市は田川小学校に子ども日本語教育センターを県内で唯一設け、日本語を母語としない子どもたちの支援をしているが、学習言語が習得できず、高校進学につながらない。そうした多様な子どもたちへの対応は大事な視点なので、公立私立ともにそこに目を向けてもらうことが必要

(5) 部活動について

- ア 学校の特色・魅力に部活動があるが、中学校も少子化により野球は合同チームを組まないと活動できない状況。私立高校では、特化や強化クラブなど特徴を出している。公立高校でも、この競技ならこの高校といった特徴を持たせる取り組みが必要
- イ 高校の部活動は、教員のボランティアに依存している現状。存続の厳しい部活がある。(人的、質的)
- ウ 部活動の在り方は、今後大きく変わる。部活動の地域化や高校間交流など高校教育から分離していくことが必要

(6) 地域との連携について

- ア これからは、高校も小中学校と同様に地域の方々と連携し、プロフェッショナル(社会人、実務家教員)の人たちから学ぶ機会が必要
- イ 日本ウェルネス長野高等学校は、開校にあたり、地域と学校をどう結びつけるかという視点で、私立ではあるが、村立高等学校のような位置付けの学校づくり。中学校で1週間ぐらしか登校できなかった子どもが、ほぼ毎日3年間通い続けて大学に進学する例もあり、そういう子どもたちの心の変化を大事にしながら地域が応援

- ウ 最近は高校においても、地域との連携を強調しながら、地域の学校として存続させるという位置づけ（特に中山間地存立校において）
- エ 地域の人との触れ合いなど、様々な体験により心の変化が起こるような状況がある。各校が、子どもの成長を目指して、多様な学びとしてどのような教育活動をしていくかが特色になる。
- オ キャリア教育に関しては、学習指導要領が変わることに伴い、キャリアパスポートという議論が出ている。小学校の子どもたちのキャリアの認識を中学校にそのままデータで引き継ぎ、それを高校にまで引き継ぐという仕組み。例えば飯田地域では地域人教育の取組みが進んでおり、町ぐるみで子どもをどう育てるかということ、国の後押しもあって考え始めている。松本でも地域の魅力を生かすためには、公立・私立学校、あるいは県や市町村の教育委員会を横断する形も重要
- カ 各学校が地域連携を大事にしながら、それをどの様に子どもたちへ学びという形の中に落とし込んでいくのか、それぞれの取組みを理解した。

(7) 中・高・大連携、学校間連携について

- ア 松本地域の小・中・高の子どもたちや先生方が、地の利を生かした交流を盛んにすることで、信州大学を中心にまとまるべき
- イ 荒井先生にも関わっていただき、信州大学、県ヶ丘高校、清水中学校の交流が効果的。例えば、信州大学学生の県ヶ丘高校への探究の部分の関わり、県ヶ丘高校生徒の清水中学校の学習発表会への関わり、信州大学の学生の夏休み勉強の手伝いなど
- ウ 地域の連携と中高の連携の事例があったが、学びの継続、探究的な学びを深めていく上では小、中、高の接続が大事
- エ WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）の関係で、ネパールの人たちとオンラインで海外研修を実施したところ、他校の生徒も参加。良い企画があったらそこに皆で乗ろうという部分も少しずつ出てきている。県とか市ではなく、松本の地域、広域も含めて全体で、子どもたちが行きやすい魅力ある学校をつくることが重要
- オ 今後の課題として、学校間連携について、県立高校においては、県立高校同士のネットワークをもっと重視すべき。それにより、新しい学びのスタイルとか、高校生同士の学びの広がり期待
- カ この高校だから、この教育の機会が利用できないという時代ではなくなる。このことを学びたい子は、この時間帯にここに集る、という形になってくるのではないか。それが松本という土地柄を考慮した場合には地の利となって、むしろやりやすくなる（松本地域のキャンパス化）。学びたい事を自由に学べるという時代になるのではないか。
- キ 課題はあるが、公立高校と私立高校との連携についても模索したらどうか。これは、松本地区という点においては不可欠な視点。さらに、公立・私立の他にも高校と大学、高校と中学といった部分もキャリア教育の一環として高校生にも貴重な機会

ク 公立・私立の学校間連携については、例えば探究的な学習も、近くの学校だったら講師が入り混じっても一緒にやってみるとか、特に文科系の部活なども含めて共に学んだ共有体験ができれば、この地域で一緒に暮らしているという実感を持ち、将来的にこの地域を良くしていこうという連帯感が学校を超えて生まれてくるのではないか。

(8) 施設環境整備について

ア 不登校の子どもたちが、新型コロナウイルスの関係で週一回の登校の時には登校できていたが、通常登校に戻ったら出てこられなくなったということを知る。ICT化による環境整備により、オンライン授業などで、不登校の子どもたちの学力保障ができるような形を要望

イ ICT、オンラインも活用した多様な学びをどう実現していくかという視点も今後必要

ウ GIGAスクール構想により、小中学校も一人一台端末等が整備されるが、小中、そして高校も含めてICTを活用した学びの連続性をどう実現していくかという視点も必要。また、義務教育との関係づくりを進め、この地域の子どもたち全体をどう育成していくかということと共に考えることが必要

エ すべての学校を同じように整備するのではなく、特色ある施設などをシェアして活用するなど、学びの多様化に応えられる整備が必要（学校配置も含め）